



1



2



3



4



5

1. 「荒野のグラフィズム：粟津潔」展
読み聞かせ風景（2008年4月6日）
2. 「ロン・ミュエック」展鑑賞風景（2008年6月21日）
3. 「愛についての100の物語」展 土橋とし子
《ア（我）とイ（意）とEyeのある部屋》鑑賞風景（2009年7月25日）
4. 「Olafur Eliasson Your chance encounter /
オラファー・エリアソン—あなたが出会うとき」展
鑑賞風景（2010年1月23日）
5. 2009年度コレクション展「shift—揺らぎの場」村山留里子
《無題》の展示室での読み聞かせ風景（2010年2月6日）

アートライブラリーの活動

アートライブラリーは美術館に併設する図書室として、展覧会鑑賞者をはじめ、来館者全てを対象に開いている。図書資料約3250点、和雑誌42タイトル、洋雑誌16タイトル、視聴覚資料約130点。（2009年12月時点）蔵書構成は現代美術のジャンルを中心とするが、作家や作品を理解するために必要な資料は他のジャンルの資料も置いている。貸し出しは行っていないが、視聴覚資料の閲覧、複写、レファレンスなどのサービスを提供している。

2007年度よりアートライブラリー独自の鑑賞プログラムとして「絵本を読もう」を開始した。絵本の読み聞かせと作品鑑賞を組み合わせたプログラムで、司書と展覧会担当者が協働してつくりあげる。2,3歳～小学校低学年の子どもたちとその保護者を主な対象とし、展覧会のテーマにあった内容の絵本を展覧会担当者と協議して選書する。作品がある美術館だからこそできる、絵本の世界と作品世界が融合するプログラムとして企画した。

2007年度「荒野のグラフィズム：粟津潔」展では、壁面の1000点を超す作品に囲まれた空間で、作家が絵を描いた絵本の読み聞かせを行った。2009年度の長期プロジェクト型展覧会

「広瀬光治と西山美なコの“ニットカフェ・イン・マイルーム”」では、鑑賞者が制作したニットの花に囲まれた小道をめぐりながら展示空間を鑑賞し、奥の一角（エトワール）にて読み聞かせを行った。同年度のコレクション展「shift—揺らぎの場」では、村山留里子作品《無題》の展示室一角でコンクリートの壁面を背景にして絵本の読み聞かせを行ったが、参加者が鑑賞のために振り返った瞬間の村山作品との出会いを大切にしたいと考えた。展示室で読み聞かせを行う場合は、絵本と展示作品が互いの世界を干渉したり、先入観を与えたりしないよう配慮する。2008年度の「ロン・ミュエック」展や2009年度のいくつかの展覧会では、キッズスタジオや授乳室前スペース、光庭等に読み聞かせ場所をつくり、距離的・時間的な間をとって作品鑑賞を行い、絵本と作品それぞれの世界観を大切にしたい。

鑑賞の場面では、展覧会担当者が子どもたちと作品を見たあと、「何が見えた?」「何色があるかな?」「どんな格好をしているかな?」「一番お気に入りのものはどれかな?」など声かけを行いながら、子どもたちが自然に、しかもよりしっかりと主体的に作品を見ることを促し、それぞれの見方を尊重する。大人は子どもたちの

反応を見聞きしながら、子どもたちの目線での作品の見方に気づかされる。子どもたちにとっては、自分の発見や驚きの体験を親しい家族と共有した満足感があるだろう。

一般鑑賞者との関わりが生ずることもある。たとえば、偶然居合わせた一般鑑賞者が絵本を聞く参加者の輪に加わったり、時には体を使って表現する子どもたちの様子に見入って立ち止まったり、鑑賞のきっかけを提供する機会となることもある。

絵本は1冊まるごとでひとつの作品といえる。よい絵本は絵が物語り、音声となった言葉を耳から楽しむ。子どもも大人もそれぞれの人生経験なりに絵本の世界に入り込み、登場人物に共感したり、心地よいリズムに共鳴したり、意識下にあった過去の経験を思い出したり、言葉にならなかった思いが言語化されたり等々、絵本によってよび起こされ広がる世界を楽しむ。こうして自分の中に広がった世界と、展覧会で作り上げられている世界が相互に作用し、より深く広い鑑賞体験が生み出されることをねらう。そのための絵本選びや場の設定は重要な作業であり、展覧会担当者と事前の話し合いを重ねて慎重につくりあげるようにしている。

（鍛冶裕子／ライブラリアン）